



なんでも見つかる夜に、ここだけが見つからない

東畑開人 著
新潮社
2022年3月 286頁
本体価格 1,600円+税

人生はしばしば航海に喩えられます。この物語はわたしとあなたが夜の航海に出ようとするところから始まります。夜の航海という言葉を開いただけでも先の見えない漆黒の闇のなかで不安になり、迷いの気持ちが湧いてきます。

実生活では一人で夜に航海に出る経験はあまり持ちあわせてはいません。近いものがあるとすると暗闇のなかで道を歩もうとするようなことでしょうか。そのような時を想像すると私たちは音や光に頼って歩いていく方法を取ったり、手すりや張られた縄などを頼りに歩いていこうかと思えます。

「ここだけがみつからない」という言葉はとても気になります。「見つからない」は言い換えると「目に見えない」ことかも知れません。「かんじんなことは目に見えないんだよ」(サン・テグジュペリ)とありますが、本当に大切なもの=ここは目に見えないことになります。大事なものがみつからないままでは何か気がかりです。そこで、「見つからない」はまた「見つけよう」もしくは「見つけたい」という思いにつながりそうです。

ここに抛り所がなく、彷徨ってしまうとき、それは何か導いてくれるものがが必要です。航海では灯台から放たれる光、道に迷いそうなときは道標が必要ですが、それらを本書では「心の処方箋」と呼ぶようです。またもう一つの方法もあるそうです。それが「心の補助線」です。

「補助線」は少し固い印象のある言葉です。そういえば、昔、数学でよくわからない複雑な図形に線を加えて知っている図形が組み合わさったものにして面積を計算したりしました。「補助線」という言葉はあまり意識していなくても、「わかりやすくするための何かの線」みたいなものと

しては覚えています。複雑な図形ではいろいろな形で線を引いては消したこともありました。

こころの問題は一筋縄ではいかない複雑な物語がからんでいます。一見して複雑でよくわからないことに「何か線を引くことでわかりやすくする」ことはいろいろと応用できそうです。図形をこころに喩えるとだれ一人として同じ図形はありません。こころの持ちようも人生の歩みも幸福の形もすべてが複雑です。そうすると助けになる線、すなわち「心の補助線」はやはりいくつか必要になります。「意のままにならない馬と、その馬を意のままにしたいジョッキー」という相反する気持ちに「馬とジョッキー」の補助線、「深くつながろうとすると、お互いの弱さがお互いを傷つける」ことから「シェアとナイショ」の補助線、など複雑なこころの持ちようを俯瞰することができるように思えてきます。

「個人化」という言葉の寂しさを思うとき、「秋深き 隣は何を する人ぞ」という芭蕉の句を思い出しました。この句では部屋と部屋が壁で区切られていて隣が見えない情景が思い浮かびます。後の時代の大都市のなかでの一人暮らしの孤独のなかで生きる現代人のことを詩っているようにも感じます。

一人一人が区切られてしまうこと、つまり人と人が交わらない形になるのは物事を分けて考えてしまうことにつながっていきそうです。補助線は図形を分けるものではありませんが、部屋と部屋を隔てる壁ではなく、分断を生み出すものではありません。複雑な図形には複数の補助線が引かれます。そして時には補助線が互いに助け合って(補助し合って)問題解決につながっていきます。ここでは心の補助線同士が『『も』の思想』で助け合う、いわゆる「メタ補助線」が大切になってくるという話につながってくるように思います。

そういえばこの物語は「小舟」が夜の航海に出ることから始まりました。「小舟」は一人ではあってもお互いに見えるものではないかと気づきました。それは壁で仕切られた「小部屋」ではありません。そう思うと何か大きな可能性があるように感じます。形もさまざまな図形に対して色々な補助線が引かれるように、心の補助線も複数の形があり、心の旅も複数ありそうです。この旅はどこに向かうのでしょうか。

(谷井久志)